

「底が突き抜けた」時代の歩き方 314

自分を突き崩さないと前へ進めない - 映画『 SHIPPING・ニュース』

映画『 SHIPPING・ニュース』は、妻に捨てられ、両親にも死なれ、人生に打ちひしがれたダメ男の故郷でのよくある再生物語と、一口でまとめてもけっして的外れではない。しかし、的は射抜いていない。「再生」よりも、「破壊」に向かう男に比重を置いて描かれているからだ。大体、「再生」というものが苦痛もなしに手軽に転がり込んでくる筈がない。現代が癒しと再生のイメージがたやすくはびこっている空洞の時代であるとしても、この映画はそんな時代におもねる安直な映画ではない。「破壊」の坑道を深く潜り抜けることによってしか、「再生」を握りしめることはできないというより、「破壊」のプロセスが「再生」のプロセスでもあるような、「破壊」のあり方に焦点を当てていることが、この主人公の重苦しく、どろどろとした血族の陰惨な暗さに一筋の光を与えつづけているといえる。

監督は46年ストックホルム生まれのラッセ・ハルストレム。『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』(85年)、『ギルバート・グレイブ』(93年)の監督といえば、顔く人もいるだろう。最近の作品に、『サイダーハウス・ルール』(99年)、『ショコラ』(00年)がある。あのスウェーデンの人気グループ「アバ」を題材にした『アバ・ザ・ムービー』(77年)の監督でもあったことを今回知って、25年前にその映画を観に行った身としては非常に懐かしく感じられる。彼がどのような監督であるかは、彼がどのような映画を作っているか、その映画を観ればはっきりするが、しかし映画を観ていない人にも、彼が『キネマ旬報』(02年3月上旬号)のインタビューで次のように語っているところから、あるニュアンスが伝わってくるにちがいない。

「社会に馴染んで生きている人にはドラマを感じないし、そういう社会を理解できるとは思えない。僕にとってはアウトサイダーとか、社会から見捨てられたような人の真実を見つけるほうが簡単なんだ」

ラッセはここで、人間には二通りのタイプがあって、一方は「社会に馴染んで生きている人」であって、他方は「アウトサイダーとか、社会から見捨てられたような人」であり、自分は後者の人々に惹き付けられると述べているように聞こえるけれども、けっしてそうではない。「社会に馴染んで生きている」間人は誰も、「そういう社会を理解できる」筈がない。そういう社会がどんな社会であるかは、その「社会から見捨てられ」て初めてみえるようになってくるのだ。なぜなら、社会と一体化している者の視線は社

会に対する疑いをもつことはなく、社会から引き剥がされることによってしか、その社会というものの姿はみえてこないからである。

しかし、このようにいったところでどこか図式的であり、ラッセから少し離れて彼のいおうとすることを考えてみたい。「社会に馴染んで生きている人」でも、その人の中には社会に馴染むことのできない 私 が深くかかえこまれていると推測される。つまり、誰でも「社会に馴染んで」いる自分と、社会に馴染まない自分の双方を生きている。ラッセが「社会に馴染んで生きている人にはドラマを感じない」というとき、双方の自分が衝突し合わずに生きられる人には「ドラマを感じない」と言っているのだ。社会に馴染まない自分が自分の深い底から、「社会に馴染んで生きている」表層の自分を突き崩していくそこにドラマが生まれるし、その格闘が深い底から起ち上がってくる自分において展開されればされるほど、ドラマもまた深みを増していく。

ラッセのいう「アウトサイダー」は、社会の中から弾き出されてしまったが故に、弾き出された社会の中へもう一度以前のように戻ることを必死に願っている存在ではない。また、社会の中から弾き出された場所を彼にとっての新たな居心地のよい住み処とするような存在でもない。社会の中から弾き出された場所にも、社会同様、馴染むことのできないしこりを大きくかかえこんでいる存在である。社会の中から弾き出された場所もまた、裏返された社会にほかならないことを身をもって知っているのだ。では、この「アウトサイダー」は自分の居場所をどこに求めるのか。もちろん、彼には居場所などどこにもない。なければ作りだす以外にないというように、彼は前に突き進んでいく。どこへ向かって？

まず自分が赴こうとするその前に立ち塞がっているのは誰でもなく、自分自身であることに気づく。であれば、その自分自身という壁を突き崩さずには、前へ一歩も進むことができない。そこからすべてが始まる。ラッセのいう「社会から見捨てられたような人の真実」とは、社会が切り捨てていくもろもろの部分そのまま彼がかかえこんでいるということであり、しかしそれらの部分が彼を深く立ち往生させている原因にもなっているので、彼は自分を排除する社会の秘密と、そんな社会を排除する自分の秘密の双方に迫るために前へ進もうとするのだ。そうしなければ生きられなくなっているほど、彼は自分を追い詰めているし、そのような場所に立ってしまっているのである。それは彼が勇敢であるなしにかかわらず、生きるということはそういうことではないのか、という人間にとっての最大の問題を提示しているということだ。そのとき、彼が手にしている武器が映画では「 SHIPPING・ニュース」であった。

映画のオープニング・シーンは、父親に湖に突き落とされて一人の幼い少年が溺れている場面である。父親の教育方針であろうが、少年は泳げずに水中でボコボコと気泡を沸き立てながら、必死にもがき苦しんでいる。その少年が主人公クオイル（ケヴィン・

スベイスシー)の幼少年時代を浮かび上がらせている。彼はニューヨーク州北部にある冬枯れの荒涼とした町の新聞社の印刷現場で、消え入るように働いている。そんなひっそりとした生活を営んでいる彼が、およそ不似合いな美しく魅力的な女性ペタル(ケイト・ブランシェット)と出会い、たぶん生まれて初めて舞い上がるのである。人は自分の欠けている部分を大きくかかえこんでいるようにみえる異性に惹き付けられるというか、クオイルにとってペタルはまさにそんな女性であった。だがペタルにとっても、クオイルは自分に縁のない実直さと慎ましさを兼ね備えている男にみえたのだ。

お互いに不幸な出会いであった。結婚した二人の間に娘バニーが生まれるが、激しい気性のペタルは萎縮してためらう夫の卑屈な姿に我慢できず、毎晩安酒場で働き、娘のバニーもほったらかしで夜遊び、男漁りを繰り返す。娘の世話をしながら、クオイルはそんな妻の行状を黙って見ているだけである。ある日、仕事場の留守番電話に父親からの「もう人生は長くない。父さんと母さんはもうすぐ死ぬことにした」という遺言のようなメッセージが入っており、クオイルは悲しみで打ちひしがれる。夫の父親が死んだことを聞かされた妻は、覇気がなく愚鈍な夫の姿に嫌気がさし、バニーを連れて若い男とフロリダへ出奔する。両親に死なれ、その上妻にも見捨てられ、娘も妻に連れ去られて、一人ぼっちになって悲嘆に暮れるクオイルの元に、兄の死を知った叔母のアグニス(ジュディ・デンチ)が訪ねてくる。

アグニスの突然の来訪にクオイルが戸惑っていると、州警察からの電話が入って、妻が交通事故で亡くなったと告げる。後で妻は車ごと川に落ちて溺死したことを知り、クオイルは「アイ・アム・ノット・ウォーターマン(水が嫌いなんだ)」を口癖にするようになる。更に、妻が裏取引の養子縁組として、娘のバニーを6千ドルで売り飛ばそうとしていたという衝撃な事実も聞かされる。クオイルは遂に人生のどん底に叩き落とされたのだ。子供の頃から「溺れ」つづけてきた彼は、大人になっても「溺れ」つづけており、ペタルと出会ったとき、彼は漸く「溺れ」つづけてきたこれまでの自分の人生と訣別することができるのを願ったにちがいがなかった。しかし、その結婚によって彼はより一層「溺れ」つづけねばならなかった。

自力で泳ぐことが出来ず、「溺れ」かけて自信をすっかりなくしてしまった男が大人になって、その境遇から自分を救い出してくれることを期待してペタルと一緒になったとき、彼は自分が藁をつかんでいることに気づいたのだ。夜遊びしている妻の帰宅を待ちながら独りベッドでテレビを見ている時に、水に「溺れ」ている幼年時の自分の姿が差し込まれる映像はそのことを示していたのである。だがクオイルは自分が藁をつかんでいることに気づいても、いまの自分がさがるようにつかむどんなものでも藁になってしまうことには依然として気づかなかった。ペタルは放埒な悪妻にみえるけれども、それはクオイルとの組み合わせによってそうってしまったところがあるのは否めない。

自分の力で生きようとしなない男がすがりついてくる嫌悪感が彼女を悪妻に駆り立て、事故による溺死を招来することになったが、彼はその妻の“溺死”の中に自分の“溺死”を見ることはなかったのだ。

仮死状態のクオイルを見かねて叔母のアグニスは故郷のニューファンドランド島に戻ろうと誘う。人生とはつくづくこういうものだと感じ入るが、海水に取り囲まれた先祖の土地ニューファンドランド島は、“溺死”を恐れるクオイルを海（水）から遠ざけたのではなく、より一層海（水）の中に引きずり込むことになったのだ。カナダの東海岸沖に位置するニューファンドランド島は起伏の激しい岩場の岬、深く入り込んだフィヨルド、無数の入り江と沖合の島々を点在させており、島の内陸部の地形も厳しく、低木と岩肌、沼沢地に覆われた土地は、「巨大な氷河の間から生まれたような印象」を与えるという。首都のセントジョンズはもっとも霧がかかりやすく（124日）、積雪量が多く（359cm）、降雨量が多く（1514mm）、風が強く（平均風速24.3km）、曇りがち（日照時間1497時間）、要するに、自然が厳しく剥き出しになったような、人間の生存にとっては苛酷で緊張感をしいられる環境といえる。

大都会から逃れてきたクオイルにとって、この島は敗残者を優しく包み込んでくれるような故郷ではなく、むしろ打ちひしがれて声にならない悲鳴を上げつづけている彼の内界をあらわしているようで、ちょうどこの島の尖った地形や吹き荒ぶ天候がそのまま彼の中に収められているのが感じられる。彼はもはや土壇場に足を突っ込んでいたのだ。だが当然ながら、住みつくのにけっして快適ではない岩場にも人々はへばりつきながら、堂々と誇りを持って生きている。島の北の果ての地平線には一族の名のついたクオイル岬が横たわっており、その先端にはアグニスが生まれ育ち、44年間も空き家になって荒れ果てた“緑の家”が建っていた。クオイルは島の小さな地元新聞社で記者の仕事を得る。以前のニューヨークの新聞社では印刷現場であったが、今度は船の出入りの記録や港のニュースなどを扱う「 SHIPPING・ニュース」を書くように命じられる。

単なる生活の糧を得るための新聞社勤め、かつての印刷工から記者への転換といった細かな偶然の変化に見えるけれども、その取るに足らないような変化の中にこそ偉大な転機が隠されていることを人は知らねばならない。自分のこれまでのあり方を根底から引っくり返す奇跡的な武器を、自分がいつのまにか手にしていることにやがて気づくようになるからだ。記事を書いたこともないクオイルは気さくな先輩記者たちに原稿の書き方などを教わりながら、交通事故の死体に吐き気をもよおしたり、必死に書いた原稿がボツにされたりと、記者生活に入っていく。記事を書くことによって多くの村人たちとも知り合い、交流を深めていくが、この島に渡ってきたときにフェリーで見かけた美しい未亡人ウェイヴィ（ジュリアン・ムーア）とも関わるようになる。彼女は自宅を託児所にして知的障害を持つ息子ヘリーと二人で暮らしており、母を失って沈んでいた

娘のバーニーはヘリーと仲良くなり、明るさを取り戻していく。

いい記事を書いたとき、ウェイヴィから「友だちのことを誇りに思ったのは何年ぶりかしら」と褒められ、食事に招待されたことをきっかけにより親密さを増していく。娘をかかえた中年男と、息子と暮らす若き未亡人とくれば、そしてお互いに好意を寄せ合っているとすれば、一緒になるのに何の不都合もないように見える。彼女は前の妻ペタルとは正反対の敬虔な女性とわかるから、尚更そう思ってしまう。だがクオイルは一度女性に失敗した男である。二人の関係がうまくいきそうなときにペタルのカットが挿入されるのは、クオイルがペタルを忘れられないからではなく、ペタルとの関係の失敗に傷ついていることをあらわしており、それは結局、「溺れ」るイメージに結びついていく。ウェイヴィのほうもまた、クオイルの知らない秘密をかかえているように見え、肌と肌を重ね合わせて解決されるものではない、お互いの孤独な心情が逆にくっきりと浮かび上がってくるのだ。

「溺れ」つづけていたクオイルは、「 SHIPPING・ニュース」によって「書く」ことに初めて踏み入るが、「書く」ことのほうも彼の中に踏み入ってくる。「書く」こととはいうまでもなく彼にとって、自分の言葉を持つことにほかならない。クオイルはいい記事を書くことばかりに懸命になるが、「 SHIPPING・ニュース」のほうはしだいに彼自身にとっての「 SHIPPING・ニュース」を書くことを迫ってこずにはおれない。やがて彼は一族の暗い歴史を知る。一族は何世紀も前にこの島一帯を荒らす海賊で、あまりにも野蛮で暴力的だったために、村から絶縁状態になっているという衝撃的な過去だった。村の人々は「緑の家」を岬の崖の上にまで追放したのだ。視界がきかない猛吹雪の中、たった一本の縄で「緑の家」を崖の上にまで引っ張って行く村人たちの光景がクオイルの脳裡を駆け巡るが、ここで彼は一族の秘密と自分の秘密が折り重なっているのを確認するのである。つまり、彼の「溺れ」るイメージは「崖の上の家」として形象化されていくのだ。

クオイルは「ヒットラーの船」と呼ばれる古い船を記事にしたことをきっかけに安物のボートを購入し、記者仲間からまんまとボロ船を買わされたと笑われる。だが彼のそのコラムは評判がよく、社長に腕を認められ、彼は自信を深めていく。一方、情緒不安定なバーニーは島に来てから、「幽霊と白い犬」がやってくると脅えるが、クオイルは慣れない島の生活で怖い夢を見たのだと片付ける。ある晩、その正体が崖の窪みに住んでいるアグニスの年老いた従弟ノーランであることがわかり、自分の父親が絡むアグニスの忌まわしい過去を知ってしまう。併行するように、クオイルは夫が自分と息子を捨てて出て行ったウェイヴィの哀しい過去も知り、二人はそれぞれの「崖の上の家」で必死にこらえているお互いの姿を見出して、すべてを吹き飛ばすような嵐の夜、愛を確かめ合う。

初めて「緑の家」に泊まったバーニーは翌朝、建物を支えているロープに耳を当てて、「この家、泣いている」といい、「緑の家」が吹き飛ばされる幻影を口にする。バーニーを優しく抱きしめたクオイルは彼女に遂にペタルの死を告げる。娘は「パパも悲しみたくなかったから私に嘘をついていたんでしょう」と優しく語りかけ、天から降ってくるような娘の思いやりに彼は涙を流し、全身で精一杯泣く。村のかつての出来事のなにもかもを吹き飛ばすような勢いで荒れ狂う嵐は、バーニーの幻影どおりに支えていたロープを荒々しく引き抜いて、「緑の家」を打ち壊す。クオイルを始め、アグニスやウェイヴィ、バーニー、そして他の各々が心の中に奥深く潜ませている「崖の上の家」が、現実の岬の崖に立つ「緑の家」の倒壊によって、風穴が開けられつつある予感を示唆しており、この島独特の透き通った陽光を浴びて輝くクオイルの笑顔は、自分をこれまでずっと閉じ込めてきた固い殻を漸く突き破って歩きだす自信を湛えている。

この映画が独自に持つ魅力は、一枚の静止した絵画的なイメージの映像が随所にちりばめられていることだ。すでに触れているが、父親によって水中に投げ込まれた少年クオイルが「溺れ」るシーンであり、「崖の上の家」がそそり立つシーンであり、猛吹雪の中、何十人もの人々がその家を引っ張って行く幻想的なシーンである。これらのシーンの繰り返しによって、ストーリーには収まらない無限のイメージの飛翔を観る者に与えつづけている。たとえば、少年の「溺れ」るシーンは老若男女を問わず、人は水中で溺れるだけでなく、金にも恋にも、また数や時間にも、要するに、何にでも溺れる存在のイメージを漂わせるし、「崖の上の家」のシーンはこの世に生み落とされた人間は誰でも、心の中にさまざまな「崖の上の家」を深くかかえこんで生きていることを喚起する。視界が全くきかない猛吹雪の中を人々が家を引っ張っていくシーンは、見通せない暗闇の中で何かを一生懸命引っ張っている我々の日常的な姿に重なってみえてくる。

映画のもう一つの主役が、島民たちの手に負えないニューファンドランド島の厳格な自然そのものであることは間違いないが、人工的な都会と異なって、この島では剥き出しの自然に直接向き合う日々の生存の仕方が大きな比重を占めており、人間同士の関係もその中で生みだされ、維持されていく。自然の言語が猛威を振るっている場所のような気がするが、そこでの人間は自然の言語を翻訳し、自然とも対話を積み重ねていくような言語が求められているにちがいない。クオイルにとっての「 SHIPPING・ニュース」はしたがって、自分と他の人々の心の中にある「崖の上の家」にむかって「書く」だけにとどまらず、自然が現にかたちづくっている「崖の上の家」にむかっても「書く」ことを続けなくてはならない作業だったのだ。生きるということはやはり、そういうことではないのか、という言葉が映像の中から猛吹雪とともに聞こえてくる。

2002年7月6日記